

# 言語学における構造主義<sup>1)</sup>

原 誠

## 0. 序

東京外国語大学の大学院で「ロマンス諸語比較研究」を毎年担当している筆者は、かねがね同授業で用いるのに適当なテキストが見当たらないことに少からず困窮していたが、そこへ現われたのが、Anderson & Creore (ed.), 1972であった。その表題Readings in Romance Linguisticsをみただけで筆者はテキストに用いることに決めたのであるが、いざ院生諸兄弟とこれを読み始めてみると、筆者には一大欠陥とも思える特徴が同書の中に発見された。それはほとんど全ての論文が「一語における」と題されていて、ロマンス諸語について比較研究するという筆者の本来のイメージからは程遠いものであるということであった。しかも更に言わせてもらうならば、ロマンス諸語の中でもカタルーニャ語、レト・ロマン語、サルジニャ語、イタリア語等を扱った論文は1点も載っていないのである。しかしこれらの不満については今は多くを語る気にはなれない。むしろそれよりも筆者の関心を惹いた冒頭の論文2点についてここでは取扱いたいと思う。その2点とはMalkiel, 1964とPosner, 1967である。ただしここでは前者を割愛して後者のみ取扱うことにする。その理由は後者が前者の影響を著しく受けており、立論が前者に比べて著しく具体的だからである。なお、これら論文2点だけはAnderson & Creore(ed.), 1972の他の大部分の論文と違って、我々がロマンス語学にアプローチする際の一般言語学的根本態度について述べていて、その意味で甚だ異色のあるものであることも付記しておかねばならない。

さてその問題のPosner, 1967であるが、一応Positivism in Historical Linguisticsと題されているものの、実はHall, 1963の書評になっている。そこでまずHall, 1963とはいかなる書物であるかということに先ず触れねばならない。

## 1. Hall, 1963のあらすじ

この書物は比較的ページ数が少い上に論旨が明快である。ここでHallの批判を浴びる言語学者はCroce, Vossler, Bàrtoli, Bertoni, Spitzer, Jordan, Coseriu, Catalan, Bonfante等のそうそうたるメンバーで、いずれも観念論者であるとのレッテルを貼られている。もちろんHallは彼等を観念論者と決めつける以上、アメリカ構造主義言語学の立場に立っているのである。

そこでHall, 1963の中から重要と思われる部分を2箇所だけ抜粋しておく、次の様である。

“言語への科学的アプローチに対するこの反抗的態度は、言語学における「観念論」として知られる運動の基盤に見受けられたのである”(p. 2)

要するにここではCroce以下の前述の学者たちの反科学的態度が批判されている。次にHallの書の末尾の方で、まとめの意味でこういう観念論が言語学界に流した害悪が3つに分けて列挙されている。

### “1. 方法論上の害悪

観念論的アプローチは、それが観察可能な事実の客観的研究を、言語において表面に現

われず、証明不可能な「創造的精神」の顕示を探し求めることによって置き換えてしまった点において、反科学的であった。

## 2. 職業上の害悪

観念論的アプローチは、真摯にして学問的な努力の代わりにディレッタンティズムを奨励し、またお互いに教えたり教えられたりしようとする学者たちの意欲と相互理解の代わりに、自己中心的な個人主義を奨励した。

## 3. 文化的な害悪

観念論は、言語および文学の歴史における個人個人の研究を強調し過ぎたがために、これら2学問分野の研究が、人文科学の一部であるばかりか、社会科学の一部でもあるという事実をその後継者たちに対してひた隠しにしてしまったのである。この偏見のために彼等は特に言語の社会的機能を研究する際に、人類学的観点の関与性と大なる貢献振りを理解することができなかった。観念論はまた自己弁護的な自画自讃と非合理的民族主義の強迫観念を含めて、非関与的諸要因の導入をも推進したのである。”(pp. 93~95)

1.の方法論的害悪にあっては、要するに客観性に乏しい手法がいわゆる観念論では採られていることが述べられているのであって、この批判は筆者も当を得ていると思う。

しかし2.の職業上の害悪についてはどうであろうか？ このような観念論というのはいわばヨーロッパの伝統的学風なのであって、Hallのようなアメリカの学者がいささか感情的になって非難しているような気がしないでもない。

3.の文化的な害悪、これは非常に難しい問題である。「言語学は社会科学の一部門でもなければならぬか？」と訊ねられたら、筆者ははっきりとyesかnoで答える勇気を持たない。しかしここでは敢えてnoと答えておこう。というのは筆者は言語学を性急に社会科学のイデオロギーと結びつけるのを好まないからである。言語学プロパーの分野というのは元来隣接諸科学とは縁が薄いはずだというのが筆者の持論である。ただし「個人の研究」というHallの言が「影響力の大きい大言語学者の業績」を指すものであれば、そういう傾向が後に続く人々の眼をくらませることはたしかに好ましいことではないが、反面先人の影響力によって眼をくらまされるほどの後継者であっては困るということも真実であろう。

要するにHallの批判というのはややメカニスティックに過ぎたアメリカ構造主義言語学の立場からのものと考えて間違いないと思う。

## 2. Posner, 1967

これに対しPosnerは6項目にわたってHallへの反論を試みている。

### 2.1 ロマンズ語学では何が間違っているのか？

“私はあまりに多くの我々の仲間が、むしろ枝葉末節にこだわるような微視的研究に従事していることを認めねばならない。他方、枝葉末節にもたとえらるべき数多くのデータの間をうまくくり抜けられないような一般化は、勝負を争う資格を奪われねばならないだろう。すなわち微視的方言学によって新しいデータが報告されればされるほど、巨視的言語学という遊戯はむずかしくなるし、またやりがいもあるというものだ。”(p. 41.)

ここではPosnerは微視的研究の貴重さを強調し、さらに別の部分ではいわゆるmodern methodに対する“humanist” approachを擁護している。しかしこういう発想は日本のロマンス語学者の場合にはあてはまらないような気がする。つまりいくつかの大きなハンディキャップ<sup>2)</sup>のために我々にはロマンス語学上の微視的研究ができていく実情にある。も

っともここでPosner が意味している研究分野が主として方言学なので筆者はこのように述べたのであるが、一単語の語源学的研究とでもなると、少しは有利さが増すかもしれない。

## 2.2 ロマンズ語学の現在の課題

“現代のロマンズ語学者たちは、我々の先人によって我々に残された諸道具に単に磨きをかけるよりもむしろ、これまでいい加減な解答しか与えられて来なかったいくつかの問題を再検討した方がよい” ( p. 41 )

ここにはPosner の懐古的な態度がよく出ているように思える。

## 2.3 どれがいったい科学的方法なのか？

“しかしこれら一般的な叙述がいかになさるべきかについては不分明である。言語学に関連する科学的方法とはいったい「与えられた形式中に規則性」を探し求める自然史の方法のことなのか、それとも「与えられた規則性の形式を探し求める」数学・物理学の方法のことなのだろうか？ ( p. 42 ) ( 中略 )

いったいいくつの、そしてどんな種類のデータに基いて一般化はなされねばならないのだろうか？ ( p. 43 )”

ここには2つの疑問文が引用されているが、前者は正に核心をついた問い掛けである。この段階でそのいずれを取るかとたずねられたら、筆者は「与えられた形式の中に規則性を探し求める自然史の方法」を選ぶだろう。

また第2の疑問文は、2.1.で強調された微視的研究を尊重する態度から出て来る当然の帰結である。やはりできるだけ多くの、しかもあらゆる種類のデータが揃った上で、何らかの一般化・規則化がなされればいちばん理想的なのではあるまいか。

## 2.4 「規則化万能」の方法

Hall があまりに regularist ( 規則化万能主義者 ) であることは認めざるを得まい。その点を批判して、Posner はこの章において、

“規則に従って規則化のゲームを楽しむ” ( p. 43 )

というような皮肉っぽい表現を用いている。そしてこのような批判から出て来る彼女の対案を、次のような表現で述べている。

“その変化が語彙全体に影響を及ぼす前に阻止されたが、影響を受け易い項目にのみ痕跡を残したような、潜在的に「規則的な」変化をも含めて、二者択一的な法則をつくること” ( p. 44 )

ずいぶん融通性に富んだPosner の対案であるが、Hall 側から言わせればこんなものは「法則」ではないということになるかもしれない。

さらにPosner の文章の引用を続けよう。

“しかしながら我々の最終目的は正に説明でなければならず、これより劣った記述という仕事の際に我々は、提起せられた「なぜ？」という問いに対する可能な解答を提示することによって我々の方法の有用性を常にテストせねばならない。つまり、つまる所、我々の最終目的は、人間が充分な量のデータが揃うまで(恐らくは彼等の死後もずっと)興味ある疑問を提起するのを慎むよう人間に対して過大な注文をつけることである。” ( p. 46 )

ここでPosner が言っていることは次の2つにまとめられる。①変形生成文法理論に似て、事実の記述だけでは満足せず、「なぜ？」という問いに答える。つまり説明をせねばならない。②2.1.からすでに出ているように、データはできるだけ多く集めた方がよい。しかし筆者の考えるところでは、①の要請は常に有効であるとは限らない。早い話が「な

ゼラテン語はロマンス諸語に分化したか？」という問いに的確に答えられる人がいるだろうか？ その意味であまりに画一的な態度はそれだけ危険率も高いのである。

### 2.5. 「再構」法

ここでは比較言語学、特にロマンス語学の切り札とも言える「再構」法がPosner の檜玉に挙がる。たとえば彼女は下記のようなことを述べているが、少し調子に乗り過ぎた感があり、筆者は賛成できない。

“(それは)いかなる自然言語の構造とも一致しそうでない抽象的建造物である”

( p. 47 )

### 2.6. 文語の言語学

“「データ本位の」歴史言語学はある程度まで文語に関心を持つことを余儀なくされる。

( p. 49 ) ( 中略 )

一再ならず、科学的発見には直観が大きな役割を果たし、時には研究に動機づけを与えるのは明らかに複雑な構造の「美」への愛であることもある。( p. 50 ) ”

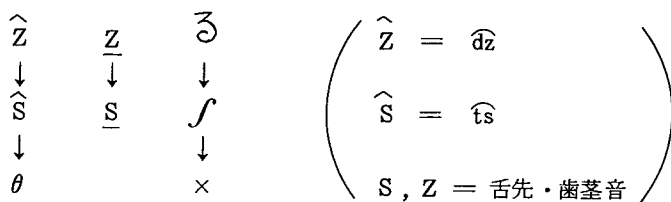
Posner が前半で述べている文語への関心、これは当然のことであるが、同時に彼女の嫌う「再構」法も当てにしなければならない。次に後半はどうであろうか？ 正に idealist の面目躍如たるものがある。しかし「美」というものは非常に主観的なものであって極端な場合には、ある人にとって美しいものが別の人には醜いものと映ずることすらあり、あまり当てにはならない。またここで彼女は直観の重要性を強調しているが、これとてもいきなり正しい直観が育つはずのものではなく、それが育つまでには、長期間にわたる科学的思考の積み上げが先行しているはずだと筆者は思う。

3. 以上筆者はHall と Posner との間の論争を私見を交えながら紹介して来たが、筆者自身はいずれに軍配を挙げるのだろうか？ どうしてもそのいずれかに軍配を挙げなければならないのであれば、仕方なくPosner よりもHall を選ぶだろうが、正直なところいずれにも賛成しがたいというのが筆者の本音である。いずれにせよこの論争は構造主義対反構造主義とか、アメリカ対ヨーロッパというふうに大きく捉えてもあながち間違いとは言えないような大問題である。以下において筆者はこの件についてどういう態度をとるか、またその理由は何かについて述べて行くことにする。

4. そのためにはHall および Posner の態度をおのおのもっと敷衍した形で述べてみる必要がある。

4.1. まずHall の立場についての論評であるが、このような立場をとり、このような手法を用いることによって非常にすっきりした解決が得られるケースを例示しよう。

その例とはスペイン語における中世から近世にかけての歯擦音素の変遷のことである。



[ 第 1 図 ]

その変遷のあらましは第1図に見るとおり、3つの有声歯擦音素がいずれも無声化し<sup>3)</sup>それでも未だ窮屈だ — つまり狭い所に余りに多くの歯擦音素が詰まり過ぎていて、音素論的弁別に不都合だ — というので、さらに $\hat{s}$ が $\theta$ に、また $f$ が $x$ に変化する。その結果第2図のようにきれいな矩形をなす子音体系ができあがったのである。

p	t	$\check{c}$	k
b	d	$y^{4)}$	g
f	□	<u>s</u>	□
	↑		↑
	$\theta$		x

〔第2図〕

言うまでもなく構造主義的立場からは、母音体系にせよ、子音体系にせよ、とにかく整然とした体系になればなるほどよいのであるから、この例などはその立場を弁護するための格好の材料になるのである。それを物語るかのように、あの構造主義の嫌いな Dámaso Alonso ですら、その D. Alonso, 1962 の p. 89 の fn. 243 において  $f \rightarrow x$  の変化についての原因の説明に関しいささかの譲歩を示している。

4.2. ここでは少し先走ることになるが、構造主義があまりに極端に走るとぐあいの悪い場合もあることを指摘しておきたい。たとえば、Harris, 1951 や Hill, 1958 を見よ。さらに Bloch の諸著作なども同様である。要するに彼等は意味の取扱い方を誤まったのである。その結果彼等の標榜する IC 分析は統語論の分野において完全に行詰ってしまった。従って Chomsky, 1957 によって代表された変形生成文法理論に厳しい批判を浴びせられる結果となったのである。もっとも筆者に言わせればこの変形生成文法理論ですら意味の取扱い方を誤まったのであるが、これについてはここでは多くを語らないことにする。

4.3. ここでは少し脱線して構造主義に対する誤解の一例を挙げておこう。それは柴田, 1969 に見られるものである。その pp. 15-16 を見ると、

“言語地理学の目的と方法とをもっと鋭い形で明らかにするために、構造言語学と比較してみよう”

とあるし、またそれより少し遡るが、亀井, 河野, 柴田, 山田, 1966 を見ると、

“構造言語学が、端正な — エレガントな — 解釈、すなわち、秩序が あって 簡単な構造が得られるまで抽象と分類をつづけてゆくように、言語地理学では、きれいな (圈点 — 原著者) 分布が得られるまで地図を描きなす。分布がある！ それもきれいな分布がある！ それは言語地理学者にとって信念にちかい。” (P. 285)<sup>5)</sup>

と書かれている。このような解釈だと、いわゆる構造言語学は言語人類学だとか言語地理学だとか言語社会学だとか対等の地位に置かるべき言語学の一分野ということになってしまうが、筆者はそうではないと思う。これについては Piaget, 1970 が名言を吐いているので、ここではそれを借用しておこう。

“結局のところ構造主義は、まさに方法であって学説ではない。” (p. 145)

5. ここでは Posner の側に立つ、いわゆる反構造主義というか観念論の立場についての論

評を行うことにしよう。4.におけると同じように、まず観念論の立場、あるいはそれに類似の立場に立つと思われるいくつかの所論を紹介しておく。

#### 5.1 Grammont, 1960

上記のGrammontの著書の第V章は「音変化の諸原因」と題されていて、以下に記する7つの原因が記載され、説明されている。

1° 民族の影響

2° 環境、太陽、気候の影響

3° 最小努力の法則

4° 矯正されずにむしろ一般化した子供の言い誤り

5° 政治的・社会的状況の影響

6° ある種の原因は……別の条件下にあっては変化の動機となり得る、特に「流行」などが。

7° 類推

このうち筆者が特に問題としたいのは1°と2°である。<sup>6)</sup>1°はより具体的には民族による口の形の違いを指している。2°では田舎の方が都会の人よりも強い発音をするとか、平野部の人よりも山間部の方が強い発音をするとか述べられている。しかしいずれにせよこれらは直ちに反例を挙げられ得るという性質を有していて、一般性に乏しい。従って第一義的な音変化の原因としてこれらを掲げるのはどうかと思われる。

#### 5.2 Wartburg, 1952

この書は始めから終わりまで、ロマニヤのロマンス諸語に起こった諸音変化についての下層言語による説明であると言ってよい。その意味ではなかなか大胆であるが、やはり説得力に乏しい。というのは一読すればすぐ反例を思いつくからである。

#### 5.3 亀井, 1970

まずそのp. 12を読んでみると、

“Individualist シュハートはまた徹底したRelativistなのである”

と書かれている。しかしこれでは一歩も前進できないのではないかと危ぶまれる。筆者は徹底しない、適度なRelativistがよいように思う。

次にそのp. 18を見ると、小林英夫氏著「言語研究、態度篇」のpp. 5-6からの引用がなされている。引用の引用になってしまって不本意であるが、今それをここに引用しておこう。

“歴史の対象は実在的な生にある；生の発展にある。そうしてこの生は個別者（個物）にのみ、やどるものである。

……単一なるもののがすぐれた役割を見て不満をおぼえる人は科学的立場に立つ人びとである。しかしそれはなにもこの場合にかぎったものでなく、研究のあらゆる段階において経験せざるをえないことがらである。かれらは憂鬱にならざるをえない。考察がこまかになればなるほど、事態は複雑になる。個物にちかづくほど、種差がますますからだ。”

ここで小林氏が述べておられることはPosnerの主張と共通しており、典型的な観念論者の態度である。筆者はかかる場合にあまり憂鬱にならないけれども、これは筆者の微視的研究が未だ徹底したものでないからなのだろうか？ しかしいずれにせよ、複雑な事態をよく見据えた上で、例外にも決して眼をつぶることなく体系化・一般化を目指すのが我々のつとめであると筆者は考える。

#### 5.4 Messing, 1951

これはいままで筆者が挙げて来た例とはいささか異なっており、あるいはここに引用するのは適当でないかもしれない。

Messing がこの論文で主張していることは「構造主義言語学は文化のあまり進んでいない民族の言語と文化的な言語とを同等に取扱って、これらに同一の記述方法を適用しているが、これは誤りであって、文学の伝統のない言語とそれがある言語とでは自ずから記述方法が相異ならねばならない」ということである。この問題については筆者が無理に反論を企てる必要はなく、Nida, 1947 という名著にすべてを任せることにする。

#### 5.5. Bonfante, 1947

これもまた典型的な観念論の立場である。大変長大な論文なので、Ivić, 1965 の邦訳の p. 66 に、要領のよい紹介があるのでその部分を以下に引用することにする。

“人間は言語を物質的のみならず精神的意味においても — その意志・想像力・思考・感情によっても — 創造する。言語はその創造者たる人間の反映である。言語に関するものはすべて精神的ならびに生理的過程である。

生理学だけでは言語学の何物をも説明できない。生理学は特定の現象が創造される際の諸条件を示し得るに過ぎない。言語現象の背後にある原因は人間の精神活動である。

「話す社会」 speaking society は現実に存在しない。それは「平均的人間」と同様に仮構である。実在するものはただ「話す個人」 speaking person だけである。言語の改新はどれも「話す個人」が口火を切る。

個人の創始になる言語の改新は、その変化の創始者が重要な人物（高い社会的地位の持主、際立った創造力の持主、話術の達人、等）の場合に、一層確実・完全・迅速に社会に容れられる。

言語において正しくないと思し得るものは何一つない。存在するものはすべて存在するという事実故に正しい。

言語は根本的には美的感覚の表現であるが、これはうつろいやすいものである。事実、同じく美的感覚に依存している人生の他の面（芸術・文学・衣服）においてと同様、言語においても流行の変化が観察できる。

単語の意味の変化は詩的比喩の結果として生ずる。これらの変化の研究は人間の想像力の働きを知る手がかりとして有益である。

言語構造の変化は民族の混合の結果として生ずるが、それは人種の混合ではなく、精神文化の混合の意味においてである。

事実上言語は、しばしば相互に矛盾する様々の発展動向の嵐の中心となる。この様々の発展動向を理解するには、様々の視角から言語現象に接近しなければならない。まず第一に、個々の言語の進化はとりわけ地理的・歴史的環境に規定されるという事実を考慮に入れるべきである（例えば、フランス語の歴史は、フランスの歴史 — キリスト教の影響、ゲルマン人の進出、封建制度、イタリアの影響、宮廷の雰囲気、アカデミーの仕事、フランス革命、ローマン主義運動、等々 — を考慮に入れなくては適切に研究できない。）” この引用の中には「人間の精神的活動」、「美的感覚の表現」といった、いわばメンタリストティックなことが出ている。この件に関する筆者の考えは、文法を書くのに意味は必要不可欠であり、従って一時の Harris, 1951 のような、意味を実際には考慮しておきながらわざと意味には頼らないふりをし分布に頼るといったメカニスティックな行き方にはもちろん賛成できない。しかし上に引用したような「人間の精神的活動」とか「美的感覚

の表現」とかいう句になると、その意味するものが極度に主観的になり、筆者はこういう態度を「アルトラ・メンタリズム」と名づけたのであるが、こういう行き方も排除されねばならない。従って「メンタリズム」はもちろん可であるが、「アルトラ・メンタリズム」は不可である。例えば音楽の分野について言うならば、筆者などは武満 徹のような現代日本の音楽を最も美しいと思うが、他方ではモーツァルトでなければ絶対にだめという人もたくさんいる。このように美的感覚は人によって著しい差がある。言語学において純客観的態度を望むのはとだいに無理な注文であるが、なるべく客観的であろうと努めることは望ましいことである、とまとめられよう。

#### 5.6. Martinet, 1955

この書の第11章は「ケルト語における軟音化と西ロマニヤ諸語の子音」と題されている。また第12章は「接触する2つの言語構造：スペイン語における歯擦音の無声化」と題されている。前者においてMartinet が言わんとするところは西ロマニヤにおける無声破裂音の有声化は地理的に言ってケルト語の軟音化と関係があるとするケルト語下層言語説である。また後者において彼が言わんとするところはスペイン語において中世末期から近世初頭にかけて起こった有声歯擦音の無声化は地理的に言ってやはり有声歯擦音を欠いていたバスク語の影響であるとするバスク語下層言語説である。筆者はこの両説いずれにも賛成しない。その理由は、音韻変化の原因を説明する際、筆者の考えでは社会・文化的要因はその優先順位からして第3位にとどめ置かるべきもので、上記2現象とも他の第1位、第2位を占める要因によってより convincing な説明が可能になるからである。これらの詳細については、Alarcos, 1965 や原, 1967, 1970, 1974 を参照されたい。要するに、Martinet は、このあと7.7でも引用するが、一見構造主義者であるように見えるが、実はそれほどでもないのである。筆者はこの点に関してMartinet をきびしく非難するつもりはないが、ただより説得的な説明が可能なのにそれを採択しないで、より非客観的な説明に頼る態度は好ましくないと思う。

6. さて以上筆者はHallに代表される余りにメカニスティックなアメリカ構造主義言語学を、またPosnerに代表される余りにメンタリスティックな観念論的新言語学を両方とも批判してしまった。となると筆者の結論は自ずから出たも同然となる。すなわち両者のちょうど中間的な行き方を筆者は支持したい。もともと「折衷」とか「中庸」とかいうことばは科学においてはあまり好まれない傾向がある。筆者も以前は性格的にこういう態度は好きでなかった。しかし段々にこのような穏健な行き方を好むようになってしまった。もちろん始めのうちはずいぶんこれにさからったのであるが、運動会の綱引きで一旦相手方に引っ張られ出すと自分の意志に反してずるずると引っ張られるのと同じように、以前はあれほど嫌っていた、いわばなまぬるい行き方をするようになってしまった。その原因は奈辺にあるかを考えてみると、どうも言語学というものが自然科学とは異なって、微妙な感情までも取扱わねばならない人間の学、つまり人文科学に属するからであるらしい。云い換えれば、現時点ではどうしても割り切れない部分というものをどうしても認めざるを得ないということになる。

このような行き方をしている典型的な例は例の有名なプラーク言語学派である。特にそのTravaux Linguistiques de Prague の第2巻(Paris, 1966)は「言語体系の中核と周辺の諸問題」と題されていて、全巻もっばらこの問題を扱っている。ここではこの巻に



含まれている26篇の論文の内容を逐一紹介している余裕はない。そこでこの問題について要領よくまとめて紹介を行なっている千野、1972の一部を引用することによって肩代わりをつとめてもらうことにする。

“ブラーク学派の言語研究において、構造的、すなわち、機能的な体系としての言語観とともに深く根ざしている研究方向に、言語の構造的の限界、言語の非構造的、非体系的な面の指摘が考えられる。”(p. 9.)<sup>7)</sup>

以下において筆者はこの言語の非構造的、非体系的な面というのを実例を挙げて説明して行こうと思う。

#### 6.1 スペイン語の音節末の-rの発音について

例を挙げるならば carne (肉), perla (真珠)における-rがそれである。この場合は一般のスペイン語入門書の発音の項に書かれているところとはちがって、実ははじき音で発音してよいのみならず、ふるえ音で発音してもよいのである。従って、筆者はこのような場合をそうは呼ばないけれども、これはいわゆる「中和」という現象である。というわけでこのように考えるならば、「中和」という概念自体が上述の割り切れぬ部分に相当することになる。偶然にも Hara, 1973 はその題名の「半母音と中和」が示すとおり、普通の音素論の諸作業原則では割り切れぬ微妙な2問題を扱っているのである。こういう場合に強引に問題を割り切ろうとする態度は厳に戒めるべきである。

#### 6.2 スペイン語の形容詞の、名詞に対する位置

スペイン語の形容詞はそれが名詞に前置されると説明的用法であり、後置されると限定的用法であると初心者向けに説明されるのが常である。ところが実体はそんなに単純なものではない。名詞の音節の数と形容詞の音節の数とが両者の語順に微妙に影響するようであるし、また統語論に近い文体論の立場からの説明もある場合には必要とされるようである。従ってこの語順に関しては単一の説明しか用意しない態度はどうしても不可であり、必ず複数の説明を、しかもなるべく多数に用意すべきである。その意味ではこの問題を極く単純に扱った Bolinger, 1952 (佐々木, 1966 の pp. 82-101 に「Ⅷ. 語集合の構造と種別」と題して引用されている)には筆者は感心しない。

#### 6.3 スペイン語の主語と動詞の語順について

この問題も Bolinger, 1952 および 佐々木, 1966 の中で取扱われているが、やはり単一の説明 — 線の修飾 — がなされている。変形文法流にこれを単純に NP+VP とするのは誤りの最たるものである。なぜならば Juan canta. よりも Canta Juan の方がスペイン語では出現頻度が高いからである。これら2文は単純に和訳するなら、「フワンは歌う」ということだが、Bolinger 流に言うならば、前者は「フワンは生計のために物を書くのではなくて、歌って食うのである」という意味であり、後者は「歌っているのは余人ではなくフワンである」という意味になるのだそうである。筆者はこういう説明自体がまちがっていると思うが、現在のところ残念ながらそれに代わる対案を持たない。しかし現在はっきり言える唯一つのことは、この現象に関してはいくつもの複数の文体論的説明を用意せねばならないだろうということである。その意味では、もし単一のすっきりした説明で割り切るのが科学的態度だとするならば、筆者のそれは非科学的ということになるだろうが、筆者はそういう非難を受けたからといってそれを別に恥とは思わないし、反省すべきとも思わない。

#### 6.4 いわゆる副詞句強調構文について

これはたとえば Aquí es donde nació la nena. という構文のことであり、aquí とい

う副詞を主語(?)とみなして、「こここそがその〔女の〕赤ん坊の生まれた所である」と訳してもよいし、donde 以下を主部とみなして、「その〔女の〕赤ん坊が生まれたのはここである」と訳してもよい。いずれにせよこういった副詞句強調構文には多大の曖昧さがつきまとうのである。もっとも筆者はこの場合には変形成文法理論の深層構造の概念を借用して、この文は深層では *La nena nació aquí*. という形をしており、これに副詞句 (*aquí*) の意味を強める変形がかかったとみなすので、主語は *la nena* ということになるのであるが……

#### 6.5. いわゆる再帰代名詞 *se* について

これなどは割り切れぬものの最たる例である。出口、1972では残念ながらいわゆる主として自動詞につく強意あるいは変意の *SE* については触れられていない。また有吉、1974でも、出口、1972と同じく、6つぐらいあると思われるスペイン語再帰代名詞の諸用法について、「全ての *se* を再帰代名詞化変形に結びつけようとする仮定は正しいと思われるので、……」(p. 70)

と述べられている。このように、本来異質なものを強引に単一の統一的説明に帰せしめる変形成文的態度は筆者の最も忌み嫌うところである。それはともかく一つだけ割り切りにくい例を出しておく、たとえば *Se dice que llueve mañana*. (明日雨が降るといふ話だ) は「汎人称」の用法と解して、「人は明日雨が降ると言う」とも訳せるし、また「再帰受身」の用法と解して、「明日雨が降ると言われる」とも訳せる。

#### 6.6. スペイン語の冠詞

どの言語についても言えることだろうが、およそ冠詞の用法の説明ほど複雑怪奇な代物が他にあるだろうか? しかもこれに無冠詞の場合が加わって来るから問題はさらに複雑になる。佐藤、1973に見られるように、どうしても説明が *ad hoc* というか、個別的になりがちであり、体系化がむずかしい。これにはもちろん研究者の能力の問題もあるだろうが、何と言っても冠詞がむずかしいということの証拠と捉える方が正しいようだ。

#### 6.7. スペイン語の形容詞の比較級と最上級

スペイン語の形容詞の前に *más*, *menos* がつくると比較級になると一般には単純に考えられているが、特に副詞の場合などどう考えてもこの形で最上級と解さざるを得ない場合にぶつかるし、また逆に「定冠詞 + *más*, *menos* + 形容詞」という最上級の典型的な形をしていながらどう考えても比較級の意味にとらざるを得ないケースもある。とにかく単純な規則化は危険である。

#### 6.8. 再びスペイン語の子音素体系について

p	t	č	k		
b	d	y	g		
f	θ	š	x	r	r̄ l
m	n	ñ	□		

〔第 3 図〕

4.1.において我々は体系の整然性の例として第3図に似た第2図を提示したのであったが、しかしよく考えてみると、この体系の整然性にも問題は多い。たとえば歯音序列の  $\theta$  は厳密に言えば、歯音ではなく歯間音である。そういったことを言い出せばキリがなくなる。次の硬口蓋序列はもっとひどい。 $\check{c}$  は破擦音であるのに対して  $y$  はその異音としてたしかに破擦

音を有するが、やはりその摩擦異音の方が代表的である。なお筆者はyをこの位置には入れたくない。<sup>4)</sup>yはwとベヤを組むべきものだからである。このことについてはHara, 1973を参照のこと。更にsであるが、これは厳密に言えば硬口蓋音ではなく、舌先・歯茎音である。このように硬口蓋序列はいわば支離滅裂の状態であるが、その理由は、Alarcos, 1965が言うように、俗ラテン語の時代にはこの序列には音素が1つもなかった、従ってこの広い空間をあけたままにしておくのはもったいないというわけで、この空間を埋めようとする動きが起こったものと説明できる。しかしそういうわけで、この序列が埋められ出したのは比較的最近のことなので、悲しい哉やはり安定性を欠いていると言えるだろう。筆者の考えでは、ここ当分の序列は安定しないように思える。従ってyがy-wとなってこの序列に入らなくても一向に差支えないと思う。更に軟口蓋序列でxの下が空白になっているが、これには口の形が奥の方でより狭くなっていることが関係しており、本来ならrがここに入るのだろうが、そういうわけでやはりrは不安定で、この空白は埋まりにくいのである。最後に流音の系列はどうか？ これはその他の子音群とは完全に次元を異にしているようである。本稿を口頭発表した時、発表後の質疑応答において東京教育大の田中春美氏より質問があり、「Hockett, 1955 においては流音の系列にまで体系性が認められている」とのご指摘があったが、筆者はとうていそこまで頑張る気にはなれないのである。要するに音体系はたしかに整然性へと向かう傾向を有するが、無理に整然性を追求することだけは差控えたいものである。

#### 6.9. 太田, 1959

この書の5.8.1.では米語の{tʃ}は音素論的には/ç/なのか/tʃ/なのか、つまりMartinet, 1939がその昔提起した「1つか、2つか？」の問題に対してあまりはっきりした解決が与えられていない。なるほど同型性を根拠にして一応の解決は与えられているが、やはりその頼りなさは否めないのである。

#### 6.10. Alarcos, 1965

上記の書のp. 254で、Alarcosはラテン語からスペイン語への諸音韻変化の中のF→h→∅をとり上げて、

“これは基層言語によることは疑いないようである”

と述べている。あの構造主義者のAlarcosにしてからがこの発言である。筆者もたしかにこの現象についての構造主義的説明<sup>8)</sup>は可能ではあるが、Alarcosと同じくバスク語＝下層言語の素地を重視すべきであると思う。これについてはMenéndez-Pidal, 1956のpp. 198-221が非常に参考になる。

筆者は原, 1970のp. 1.において、「ある音韻変化の原因の説明にはなるべく1つではなくて2つ以上の説明を用意すべきである。その際これら複数の説明の中でも人によって優先順位が異なるであろう。筆者の場合には機能上・構造上の原因を最優先し、次に調音上の原因、最後に前記2つの説明が不可な時のみ文化的・社会的原因に頼る」といった趣旨のことを述べたが、この場合は筆者が文化的・社会的原因による説明を容認した数少ない例の1つとなっている。なおこの件に関し、Bonfante, 1947も、

“私は、あらゆる問題ではできるだけ多くの見地から、またできるだけ多くの方法によって検討されねばならないというバルトリの本質的な考えを発展させたに過ぎない。”

( p. 358 )

と述べているが、少し行き過ぎという気もしないではないが、なかなかsuggestiveな発言

であると思う。

6. 11. 以上を一応まとめてみると、「言語の文法の大部分は構造上、体系性、整然性で説明できる。もしそうでないとお互い言語による意志の疎通にすら事欠くであろうから。しかしこのことを認めた上で、周辺部には必ず割り切れない部分があることだけは覚悟しておかねばならない。すなわち人文科学は人間についての学問であるが、人間は感情の動物であり、論理だけで割り切れるものではない。」となる。これが本稿の筆者の結論なのであるが、更にこの件に関して以下で考察を続けたいと思う。

7.

#### 7. 1. 安井, 1965

上記の書物には次のようなことが書かれている。

“言語の構造とか組織とかいう面を強調し、重視する立場を「構造主義的」と呼ぶことにするならば、変形文法理論は、きわめて、「構造主義的」であり、この点については、疑念の余地はない。”(p. 64)

もしこれが真実であるとするならば — 筆者はこれは真実であると思うが —, 変形生成文法理論は, 6. 11. で筆者が述べたような意味で, あまりに regularistic (規則化万能主義的)であり, 一面的であり, しかも抽象度が高過ぎる。たとえばスペイン語で常にSをNPとVPに分けるがごとき, あまりの割り切り過ぎと言わざるを得ない。<sup>9)</sup> 筆者は間投詞1つだけから成る文を説明できない文法は信用しないことにしている。また日本語の助詞の「ハ」と「ガ」についてのあまりの割り切り過ぎは危険である。最近では変形生成文法理論では観察者1人1人の直観がすべて喰いちがってしまってただやたらに不毛な議論をくり返すことが多くなっている。また経験論か理性論か, 子供の言語習得能力についての先天的な要素と後天的な要素についての議論も一面的である。こういう議論の場合に二者択一は非常に危険であると筆者は思う。その例となるのが以下に引用する対談の一部である。

#### 7. 2. 湯川・渡辺, 1973

“生物の先験的な能力

湯川: 確かに生まれつきのものがいっぱいあるね。しかし生まれつきかどうかというところがむづかしくてね。人間の場合になるとほんとうは生まれつきのはずであっても, それを実証することがひじょうにむづかしい場合が多いわけです。……生まれてから後の親や先生や当人の努力次第で何でもできると思ったほうがたいへん気持はいいけれども, その前提として, はじめから潜在的に与えられているものがひじょうにたくさんあるということも軽視できないわけですね。”(p. 14)

この湯川氏の発言は, たしかに後天的な要素よりも先天的な要素を優先させているように解されるが, ここで大切なことは同氏が多少の差はあれ双方の要素を認めているということであり, これが変形生成文法理論に筆者が欠けていると思う点である。人文科学においては折衷的な態度が認められるケースが多々あるのではないだろうか?<sup>10)</sup>

#### 7. 3. 湯川, 1972

“い人間の言語そのものを正しく受け入れる機械は設計不可能である。”(p. 95)

この発言もやはり「言語は非常に人間的なものであり, このような人文科学的現象を, 自然科学的方法によって割り切ろうとしても無理である。」ことを物語っている。

#### 7. 4 Gray, 1939

“それ(言語学)は, 数学や化学が精密であるという意味において精密科学ではないと

ということが直ちに言われねばならない。言語学における人間の要因は、言語学をしてその操作において単に機械的であることを許すにはあまりにも強過ぎるのである”( p. 4) あまり不可知論になっても困るが、この発言なども一種の警句として頭に入れておくべきであろう。

#### 7.5. Hjelmslev & Uldall, 1957

この書ではその p. 2 において「2本のローソクの燃え方がたとえおのおのちがっていても、内的および外的原因をあげて燃え方のちがいを説明できる」と述べられ、Gray, 1939 への反論を形成している。また

“人文科学のデータは(自然科学の方法と)同様に精密な方法の適用には先天的に不向きであると信ずるには根拠不十分である”( p. 15)

という発言もあり、なかなか勇ましい。

#### 7.6 Hjelmslev, 1953.

“……; (言語の)記述は自己矛盾がないこと( self-consistent ), 遺漏のないこと( exhaustive ), 可能な限り簡潔であること( as simple as possible ) である。矛盾がないという要請は遺漏のない記述という要請に優先し、遺漏のない記述という要請は簡潔であるという要請に優先する。”( p. 7)

これまた 7.5. に続いて、むしろ regularistic な立場である。glossematics はよく代教的であると言われるが、その関係であろう、上記のような考えに立ち至るらしい。筆者はもちろん 7.5 の Hjelmslev & Uldall の考えには賛成できないが、7.6 の Hjelmslev の考えは注目に値いすると思う。それは彼なりに言語学が科学たり得る条件を提示しているからである。変形生成文法理論とちがって、簡潔性を第一に優先しない点など大いに評価してよいと思う。しかし問題は第1の規準にある。これは言い換えれば「分析態度の一貫性」ということである。しかし次に掲げる Martinet の考えは Hjelmslev のそれと真向うから対立するものである。

#### 7.7. Martinet, 1962

“全ての言語事実の取扱いのために、またはいかなる言語であれ、その記述のために単一の方法しか設定すまいとするいかなる努力も、ほとんど不可避的に、物理的に — これはもっともなことであるが — のみならず、言語の経済性の面での役割の面でも、相異なっている物と同じ説明を与える結果になるだろうことは否定され得ない。

言語の現実というものは、多くの記述主義者が喜んで認める限度以上に複雑多岐であり、非等質的であるのだ。”( p. 4)

この発言は明らかに記述態度の一貫性に疑問を提起したものであり、プラグ学派流に言えば、割り切れない周辺部については態度の一貫性を崩すということになるかもしれない。これをスペイン語文法に例をとって説明するならば、スペイン語の接続法は外形と意味との両面から攻めて行かないとうまく行かないという事実がこれに当たるだろう。すなわち、el hecho de que + 接続法(……という事実)という句における接続法は意味の上から攻めて行っても説明できない。これとは逆に me dice que vaya (彼は私に行くよう言いつける)と me dice que va (彼は自分が行くと私に言う)の両文のちがいは意味に頼らなければ、外形だけでは説明できない。従ってはじめてから外形と意味、双方を考慮する記述態度なら、多少の揺れはあっても、一貫性を保てることになるだろう。

筆者の考えでは Martinet はあまりに不可知論的になり過ぎた realist である。つまり彼

は言語体系全体に割り切れなさを認めているような気がしてならない。これに対して我々は周辺部にのみ割り切れなさを認める態度である。

#### 7.8 God's truth vs. hocus-pocus

上の問題と関連して、ここに掲げる大問題を取り上げねばならない。これについては原、1961を参照されたい。この論文は筆者がGod's truth派とhocus-pocus派の間で起こった大論争を詳細に紹介したに過ぎないものであるが、ただ最後に筆者の考えとして服部、1956のp. 56に載っている、

“私の意見では、「音韻論的解釈は単一ではあり得ない」という作業仮説よりも、「最善の音韻論的解決は一つしかない」という作業仮説の方が、実践的に有利であると思う。”という発言に賛意を表しておいた。服部氏のこの言は作業仮説としては今でも正しいと筆者信じている。しかし、本稿におけるような結論を筆者が支持する現在、この作業仮説に但し書をつけたくなくなった。つまり7.7で述べたように、Martinetはどちらかと言うとhocus-pocus派(またMartinet, 1962のp. 4の脚注1で引用されているAllen, 1957も同じ態度である)であるように見える。<sup>11)</sup>なおもっと厳密に言うと、Martinetはhocus-pocus派でもなく、realistであるのだが、それはともかく筆者も、作業仮説としてはいざ知らず、理論的にはスペイン語文法について複数の存在を認めざるを得ないように考えが変わって来た。つまり一つの言語についての文法はいくつもあり得るということになる、それら複数の文法の評価の基準が問題になって来る。変形生成文法の場合は簡潔性であったが、この基準は、特に生成音韻論において破産したと筆者は考える(特に箕・今井、1971のpp. 449-453を参照のこと)。どうも自然科学的な意味での評価の基準はなさそうな気配が濃厚になって来た。筆者には今のところよくわからないが、強いて言うならば、後世の人々の眼のみが複数の文法のうちのどれが最善かという評価を最終的に決めるような気がする。

要するに筆者は割り切れにくい周辺部を認めた上での構造主義、その割り切れにくい周辺部の説明のためには、周辺部においてのみ記述・説明の上での態度の一貫性が崩れる可能性を認める、<sup>12)</sup>言わば幅の広い構造主義を信奉したいのである。これを思い切って言い換えるならば、人間の言葉には色々が無駄があるということにもなるだろう。

8.1 さてこの言語学における構造主義は隣接諸科学へ輸出されて行った。Piaget, 1970によれば、構造主義は言語学に発して数学、論理学、物理学、生物学、心理学、人類学、哲学等の諸分野に応用されたという。しかしそれら諸分野においてそれぞれ正しい応用のされ方をしたかどうかは大いに疑問である。

8.2 早い話が、同じPiaget, 1970のp. 140には次のような発言がある。

“構造の研究は排他的なものではなく、とくに人間の科学や生命の科学においては、研究の他のいかなる次元をも不要にするものではないということである”

という警告があるではないか。

8.3 またMartinetは、Lefèvre, Martinet et al., 1970の中で、

“ヤコブソンの言語学のモデルを、人間学のはかの領域にまで拡大することは、主として隠喩の水路を通してなされています”(和訳p. 98)

と皮肉を言っているし、また和訳p. 101では、

“そのほかの人間科学については、言語学的関与性を、何とかして研究領域をカバーさせるために隠喩的に解釈することにより、純粋に、また単純に言語学的関与性を採り入れ

ることは、問題になりえません。”  
とも述べている。

8.4. さらに痛烈なのは、Mounin, 1968 であり、その和訳 pp. 8-9 には次のような発言が見られる。

“……この学問の研究への入門案内にはどうしても、特に読んではいけないもの、それも殊に始めに読んではいけないもののブラックリストをまずのせなければいけない。”  
として、レヴィ＝ストロース、メルロ＝ポンティ、ロラン・バルト、アンリ・ルフェーヴル、ミシェル・フーコー、ジャック・ラカンを槍玉に挙げ、言語学の用語・方法を余りにも簡単に他の学問に移すことを警戒しているのである。筆者もこれらの発言には双手を上げて賛意を表する者である。

8.5. 従って次に紹介する北沢、1968などは筆者が最も忌み嫌うところの所説である。

“ヴェトナム戦争やチェコスロヴァキアにおける1968年8月の事件にはじまって、日本大学や東京大学の事件にいたるまで、国際的・国内的、政治的・社会的・文化的などそれぞれの階層性のレヴェルはちがうとしても、歴史的次元でのできごとは、すでにみてきたように客観的な必然性のつながりのなかでおこったし、現におこりつつある。”(pp. 157-158)

## 9. 結 び

Hall と Posner の論争から説き起こして、言語学における構造主義は、筆者の考えでは、ブラーク学派の周辺曖昧説が正しいという結論になった。<sup>13)</sup> それと同時に一時もてはやされた他の隣接諸科学における“構造主義”が果してこのような言語学の大問題について考えた上で騒がれているのかどうかということについて少々皮肉を言ってみたかったのである。

### 〔注〕

1) 本稿はもともと昭和49年4月20日(土)に東京外国語大学において開催された第10回日本ロマンス語学会大会において口頭発表されたものである。その時の題名は「ロマンス語学と構造主義」となっていたが、その時の筆者の発表をお聴きくださった宮城 昇教授の、「あれはむしろ言語学会で発表すべきものである」とのご指摘に従い、また筆者自身も同発表はたしかにそういう一面を持っていると判断し、標記のように題目を改めてみた。

2) これらハンディキャップについては原、1967のp.15を参照されたい。

3) この問題については、Alarcos, 1965のp.270以下、原、1967および原、1970を参照されたい。

4) ここにyを入れることには実を言うと筆者は賛成し難い。なぜならばyは本来wとペヤを組むべきものと筆者は考えるからである。従って流音音素と同様に、y-wはいささか孤立した下位体系を形造ることになる。この件についての詳細に関してはHara, 1973を参照されたい。それではなぜ自説をまげてまでかかる整然とした体系を紹介したかという疑問が残るだろうが、この疑問に対しては筆者は状況が状況であるだけに、ここでは整然性を飽くまで追求する構造主義者の立場に立ったというふうにお答えしたい。

5) この書にはどの部分についての著者はだれであるということが常に明記されてい

ないが、この引用部分については一読すれば明らかに柴田氏の担当であることがわかる。

6) 問題になると言えば、まだこの他にも 4°, 5°, 6° も問題である。つまりこれらの説明は一見もっともらしいけれども、実証性に乏しく、従って説得力にも欠けるということになる。その反面ここには構造主義的な説明が現われていない。これは Grammont のこの書の初版が 1933 年であることを考え合わせれば致し方のないことなのだろう。こういった問題についての筆者の考えは原、1970 の pp. 1-2 に述べておいた。なお Lerch, 1933 の pp. 516-517 参照。

7) 注1)に述べたとおり筆者が本稿を口頭発表した時、発表後の質疑応答において小林英夫氏から「このようなことは Bally がその著 Bally, 1935 においてとっくの昔に述べている」旨のご発言があった。そこで、その直後に小林氏の訳書が再版されたので眼を通してみたところ、筆者には Bally の主張するところはむしろ中心部が割り切れず、周辺部に体系性があるということであるように思えた。

8) これについては原、1970 の p. 10 にある注7)の中で述べてある。つまり俗ラテン語からスペイン語への移行過程において、フランス語などどちがって /β/ → /v/ という変化が起らず、従って /v/ がいないために /f/ までが不安定になったという説明の仕方である。

9) これについては筆者が昭和 48 年 10 月 13 日に愛知県立大学における第 19 回日本イスパニヤ語学会で行なった研究発表「スペイン語に主語はあるか？」を参照されたい。

10) 似たような発言として桑原、1974 がある。

“ところがサルという言葉も人間のことばと基本的に違う。というのは、妊娠していたサルを飼っていたところ、一匹いた時には人間となんかちっともお話をしてくれない。ところが赤ん坊が産まれたその瞬間から、その赤ん坊と母親は 31 のボキャブラリーを全部使ってお話をしているというわけです。生まれながらにしてわかるのです。人間のことばと全然違います。われわれは何年かかかってだんだんことばを覚えて来たんで、……” (p.62)

11) 筆者の読解力の欠如のために、本稿の口頭発表の際に、Martinet はむしろ God's truth 派であるように述べたが、これは完全な誤りであった。記して謝意を表する。

12) Allen, 1957 の p. 15 にもこれと似たような考えが披瀝されている。

13) 本稿を書き上げた直後に森岡、宮地、池上、南、渡辺、1974 をたまたま読んだが、hocus-pocus 説のことが p. 150 から p. 151 にかけてとり上げられており、また構造の周辺の割り切れなさについても pp. 156-161 あたりでとり上げられていて、大変興味深く読了した。

## 参 考 書 目

- Alarcos, Emilio : *Fonología Española*,<sup>4</sup> Madrid, 1965  
Allen, W.S. : *On the Linguistic Study of Languages*, Cambridge, 1957  
Alonso, Dámaso : *La Fragmentación Fonética Peninsular ENCICLOPEDIA LINGÜÍSTICA HISPÁNICA t. 1 Suplemento*, Madrid, 1962  
Anderson, James M. & Creore, Jo Ann (ed.) : *Readings in Romance Linguistics*, The Hague, 1972  
有吉俊二 : 格文法による現代スペイン語再帰構文の一考察「熊本短大論集」49. 67-112(1974)



- Bally, Charles : *Le Langage et la Vie*, Zurich, 1935〔言語活動と生活(小林英夫訳), 東京, 1974〕
- Bolinger, Dwight L. : *Linear Modification* PMLA67. 1117-1144(1952)
- Bonfante, Giuliano : *The Neolinguistic Position* LANGUAGE 23. 344-375 (1947)
- 千野栄一: プラーク学派の言語観「言語研究」61.1-16(1972)
- Chomsky, Noam : *Syntactic Structures*, The Hague, 1957
- 出口厚実: SE受動文と再帰動詞のシンタクシス「イスパニカ」16.1-16(1972)
- Grammont, Maurice : *Traité de Phonétique*<sup>6</sup>, Paris, 1960
- Gray, Louis H. : *Foundations of Language*, New York, 1963
- 原 誠: スペイン語音素論(その3) — 言語構造は発見するものか組立てるものか? — 「スペイン図書」5.12-27(1961)
- 原 誠: 近世におけるスペイン語歯擦音素の変遷について「ロマンス語研究」1.15-22 (1967)
- 原 誠: イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(下) 「東京外国語大学論集」20.1-10(1970)
- Hara, Makoto : *Semivocales y Neutralización*, Madrid, 1973
- 原 誠: ロマンス諸語比較研究とスペイン語通時言語学とのくいちがい「東京外国語大学論集」24.1-18(1974)
- Harris, Zellig S. : *Methods in Structural Linguistics*, Chicago, 1951
- 服部四郎: 音韻論(2)「国語学」26.39-56(1956)
- Hill, Archibald A. : *Introduction to Linguistic Structures*, New York, 1958
- Hjelmslev, Louis : *Prolegomena to a Theory of Language*, Indiana, 1953〔言語理論序説(林栄一訳), 東京, 1959〕
- Hjelmslev, Louis & Uldall, H. J. : *Outline of Glossematics* TCLC X, Copenhagen, 1957
- Hockett, Charles F. : *A Manual of Phonology*, Baltimore, 1955
- Ivić, Milka : *Trends in Linguistics*, The Hague, 1965〔言語学の流れ(早田輝洋・井上史雄共訳), 東京, 1974〕
- 寛寿雄・今井邦彦: 英語学大系2「音韻論II」, 東京, 1971
- 亀井孝: 圏外の精神フーゴ・シュハート「言語研究」57.1-21(1970)
- 亀井孝, 河野六郎, 柴田武, 山田俊雄: 「日本語の歴史」別巻「言語史研究入門」, 東京, 1966
- 北沢方邦: 構造主義, 東京, 1968
- 桑原万寿太郎: 動物のコミュニケーション(1) — 生体と情報 — 「図書」301.48-63 (1974)
- Lefèvre, Henri, Martinet, André et al. : *Structuralisme et Marxisme*, 1970〔構造主義とマルクス主義(宇波彰訳), 東京, 1974〕
- Lerch, Eugen : *Aufgaben der romanischen Syntax*〔ロマンス語統辞論の課題(小林英夫訳)「方言」3-7.12-43(1933)〕

- Malkiel, Yakov : Distinctive Traits of Romance Linguistics ( Hymes, D(ed.) :  
 : Language in Culture and Society, New York, 1964 )
- Martinet, André : Un ou deux phonèmes ? ACTA LINGUISTICA 1. 94 -  
 103 (1939).
- Martinet, André : Economie des Changements Phonétiques, Berne, 1955
- Martinet, André : A Functional View of Language, Oxford, 1962
- Menéndez-Pidal, Ramón : Orígenes del Español<sup>4</sup>, Madrid, 1956
- Messing, Gordon M. : Structuralism and Literary Tradition LANGUAGE 27. 1 -  
 12 (1951)
- 森岡健二, 宮地裕, 池上嘉彦, 南不二男, 渡辺実 : シンポジウム日本語② 「日本語の文法」  
 東京, 1974
- Mounin, Georges : Clefs pour la Linguistique, 1968 [ 言語学とは何か ( 福井芳男,  
 伊藤晃, 丸山圭三郎共訳, 東京, 1969 ) ]
- Nida, Eugene A. : Linguistic Interludes, New York, 1947 [ 新言語学問答  
 ( 郡司利男, 伊東正共訳 ), 東京, 1957 ]
- 太田朗 : 米語音素論, 東京, 1959
- Piaget, Jean : Le Structuralisme, Paris [ 構造主義 ( 滝沢武久・佐々木明共訳 ),  
 東京, 1970 ]
- Posner, Rebecca : Rev. of Hall, 1963. Positivism in Romance Linguistics  
 ROMANCE PHILOLOGY 20. 321-331 (1967)
- 佐々木達 : 言語の諸相, 東京, 1966
- 佐藤玖美子 : 身体の部分を表わす名詞と冠詞について「イスパニカ」17. 1-21 (1973)
- Schuchardt, Hugo : Über die Lautgesetze. Gegen die Junggrammatik [ 音韻法  
 則について少壮文法学派を駁す ( 小林英夫訳, 林長男訳 ) 「方言」5-7. 1-31  
 (1935) ]
- 柴田武 : 言語地理学の方法, 東京, 1969
- Travaux Linguistiques de Prague 2 : Les Problèmes du Centre et de la  
 Périphérie du Système de la Langue, Paris, 1966
- 安井稔 : 構造言語学入門 [ 「現代英語教育講座」3 ( 新言語学の解説 ) pp. 1-64 (1965) ]
- 湯川秀樹・渡辺慧 : <対談> まとめるということ「図書」288. 2-25 (1973)
- 湯川恭敏 : 人間の言語の機械的処理は可能か「科学と思想」6. 80-95 (1972)
- Wartburg, Walther von : La Fragmentación Lingüística de la Romania,  
 Madrid, 1952